

# ロンドンの十日間

## 荒牧 富美江

今年も八月の末から二週間ほど、例年通りのスケジュールでヨーロッパにでかけた。連日三〇度を超す東京の暑さから逃れるつもりだったのだが、パリもロンドンも暑かった。ロンドンでは、レストランの入口に出された印刷のメニューに、手書きで「室内冷房中」と書きこまれた店が目立ったのも、この夏の異常な暑さを物語っていた。

テレビは、BBCが六時の放送開始から一時間ほど「オープン・ユニヴァーシティー」の講座を組み、早朝のニュース・気象情報は「文字放送」が繰り返し報じていた。

『朝日新聞』の一部一ポンド五〇ペンスは変わらないが、『タイムズ』は三〇ペンスが三五ペンスに、地下鉄は五〇ペンスが七〇ペンスにと、一昨年に比べ物価は全般的に上がっているようだ。前回、ウォーターloo駅前の

地下道で、ダンボールにくるまってごろごろしているホームレス・ビープルたちを見かけたが、その彼らはダンボールを立体化してすっかりした「長屋」にし、異臭の立ち込める集落をつくっていたのには驚いた。ナシヨナル・シアターに集まる人々もこの近道は避けられているようで人通りもなく、物乞いによってくる彼らをかかわして通り抜けるのは不気味であった。

さて、十日滞在の間にミュージカルを五つとセリフ劇を四つ、計九つの劇場を廻った。マチネーが二回、つまりダブルヘッダーが二日もあったのだから、すこし欲張りすぎたかもしれない。前回まではどちらかといえば大劇場が中心だったので、今回は新人作家の小劇場芝居を幾つか観たのが特色といえる。

ミュージカルは、まずロンドン・バラディ・アム劇場の「ショウ・ボート」。ジェローム・カーンとオスカー・ハマースティン二世の最初のヒット作で、一九二七年初演というミュージカルの古典である。劇場は一九〇八年の建設で客席が二三〇〇余という古めかしい大劇場である（写真上）。観客はさすがに年配の人が多く、何台もの観光バスで乗りつけたアメリカの団体客は、黒人歌手が朗々と歌い上げる「オール・マン・リヴァー」など懐かしのメロディに酔っているようだった。

次に、日本でもお馴染みの「キャッツ」は数年前、新宿の仮設劇場で「劇団四季」の舞台を観たが、ロンドンでのロングランはすでに十年続いている。以前はテレビの公開録画のスタジオだったというニュー・ロンドン劇場は、ドゥルリー・レインの反対側の地区にあり、「動く劇場」として「キャッツ」のおかげで世界中に知られるようになったといっている（写真下）。客席は約九〇〇、大きな舞台全面と客席が同時に回転するようなダイナミックな舞台機構をもち、その仕掛けを縦横に駆使したトレヴァー・ナンの演出は観客の意表をついて楽しい。夏休みのマチネーは小さな子どもで満員だった。

「キヤッツ」の作曲家アンドリュウ・ロイド・ウェバーが手がけたその他のミュージカル「スターライト・エクスプレス」は七年目、「オペラ座の怪人」は五年目のロングランで、今も来年三月末までの切符がすでに売り切れという人気である。

人気といえば、九月二日付「サンデータイムズ」の「週間のヒット」トップ・テンの劇場の部では、①ミス・サイゴン ②オペラ座の怪人 ③レ・ミゼラブル ④キヤッツ ⑤アスペクツ・オブ・ラブ ⑥スターライト・エクスプレス ⑦ミイ・アンド・マイガール ⑧ショウ・ボート……とみなミュージカルである。それではトップの「ミス・サイゴン」を観ておこうと、プレミアムを覚悟で、ブレイガイドで三〇ポンドを支払って切符を手に入れた。最高の席は二五ポンドだから、まあこのくらいなら……と思っていたらなんとそれはバルコニー（天井枚敷）七・五ポンドの席だったのには呆れてしまった。

「ミス・サイゴン」は昨年九月に幕を開けた新しい作品で、ベトナム戦争を背景にしたアメリカ兵とベトナムの少女の恋愛物である。劇場は、これも二三〇〇人くらい収容できる大きなドゥルリー・レイン。徹退するアメ

リカ兵を迎えにヘリコプターが登場、兵士を乗せて飛び去る場面を除いては、あまり新味のない「蝶々夫人」物語であった。九二年には日本でも上演されるようで、オーディションの広台がでていたがヒットするかどうか。しかし「レ・ミゼラブル」と同じ作曲家、クラウド・マイケル・シェンベルクの音楽は印象に残るものがあった。

あとの二つは小劇場ミュージカルである。アルベリー劇場（客席八〇〇余）の「ブラッド・ブラザーズ (Blood Brothers)」は双子の兄弟の物語で、双子のひとりには裕福な家庭にもらわれてゆき、ひとりは貧しい母親のもので育てられ、結果は悲劇に終わる。シリアスなドラマをミュージカル化したという趣のもの。とくに子ども時代の歌と踊りは歯切れがよく、若い俳優たちがのびのびと演じているのが快かった。ミュージカルというと大掛かりな仕掛けに派手な踊りと歌、夢物語的なものが多いが、小劇場ミュージカルのこのようなものが、もっと試みられてもよいのではなか。この作者ウイリー・ラッセルは作曲も作詞もこなす、多才な売れっ子作家のようだ。もう一つは、客席が三五〇くらいの小さな地下劇場アーツ・シアターで、一九二七年に

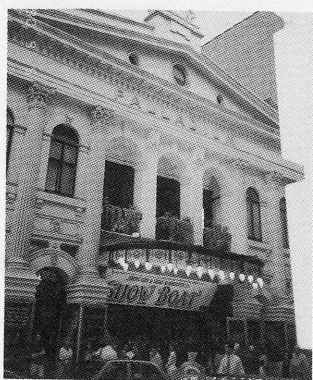
設立されて以来、次々と実験的な新しい芝居が上演されてきた伝統のある劇場である。

「ア・スライス・オブ・サタデーナイト (A Slice of SATURDAY NIGHT)」六〇年代のミュージカル」はリバプールの若きピートルズを下敷きに、当時のヒットソングを織り込んで、ナイトクラブに集まる若者たちのグループの生活を描いていたが、司会者が客席と掛け合いをしたり……どうも場違いなところに紛れ込んだ異分子のようであつていけなかつた。しかし、満席のお客は年配者から若い人まで、まことに庶民的な雰囲気で、いわば寄席ミュージカル、それがちよつと面白かつた。

セルフ劇では、デューク・オブ・ヨーク劇場（一九九二年開場、客席数七〇〇）の「ジャリー・バレンタイン」。前述のミュージカル「ブラッド・ブラザーズ」の作者ウイリー・ラッセルが書いた、中年の女性を主人公にしたひとり芝居、コメディである。子どもにも手のかからなくなった主婦が、キッチンでワインを飲みながらおしゃべりを始め、単調な生活に変化を求めて憧れのエーゲ海へ旅をする二幕三場である。八九年には映画化されて「旅する女」の題名で日本でも公開され

たというが、場面転換に乏しく、言葉のせいもあるが、ひとり芝居なら演出にもうひと工夫欲しいところ、いささか退屈だった。

あとは、ナショナル・シアター（NT）の三つの芝居である。小劇場コテスローは、トレヴァ・グリフィッツの新作「ピアノ」。これは、ミハルコフという監督がチェホフの戯曲を下敷きにして作った「機械じかけのピアノのための未完成の戯曲」という映画から、チェホフの影響をうけたグリフィッツが戯曲化したもので、役者もそろっていたし、前衛的な演出がなかなかおもしろかった。NTの実験劇場である小劇場は、出し物によって変化も自在で、舞台と客席は同一平面、壁に沿ってコの字型に並んだ椅子は二〇〇足らずで、まるで稽古場の芝居を見るような緊張感が客



「ショウ・ボート」  
ロンドン・バラディウム劇場

席に流れていた。

大劇場オリヴィエは古典劇で、シェリダンの『The School for Scandal』。イギリスでは「ロミオとジュリエット」について上演回数が多いといわれる芝居で、十八世紀末、イギリスの繁栄時代のブルジョワ社会が舞台である。最近『岩波文庫』から出された菅泰男氏の新訳『悪口学校』を読んで準備をしていたのだが、急に気温が下がったのと疲れからか風邪をひき、残念ながら大事をとってこの日は休養することにした。

NTのリトルトン劇場はシェイクスピアの「リチャード三世」である。装置の何もない黒一色の裸の舞台にひとり現れた、後のリチャード三世は、第二次大戦当時、陸軍将校が着用した長い外套を着ている。鮮やかなカーキ



「キャッツ」  
ニュー・ロンドン劇場

色と帽子の赤い帯が冴えるが、しかし、戦場で手傷を負った軍人である。今まで観てきた「リチャード三世」のイメージとは違う。ただ、ともに在るのは権力への飽くなき執着、好色といった悪徳。だが、それらはどんな人の心にも奥底に潜んでいるのではないか。アン・マッケランの演ずるリチャードは、権力を手にいれるために大胆かつ周到な術策をめぐらす、強烈なバイタリテイのある野望家である。「すべての劇は現代劇、シェイクスピアは今も生きている」というマッケランの主張がよくわかる。演出はリチャード・エアー。黒の舞台を照らす三五個のランプは、低く下げれば室内をしめし、引き上げられれば戸外、夜空の星ともなる。戴冠式にリチャードは見上げるようなクレインから獅子吼し、それを写しだすテレビ、象徴的な舞台が強く迫ってくる。なお、三時間をこえるこの芝居に「手話」がつき、舞台の袖で長時間ひとり健闘する通訳さんに胸が熱くなった。

今回は芝居のほかに国立劇場の「舞台裏見学コース」に参加したり、シアター・ミュージアムを覗くなど収穫の多い旅ではあった。

（一九九〇・一〇・四）